たった１日で生活はこんなにも変わる

荒砥　彬生（仙台市水道局浄水部施設課浄水管理係技師）（当時：学生）

私は東日本大震災が起きた当時まだ大学3年生であり、その時は宮城県多賀城市の実家で暮らしていた。現在はその隣町である仙台市で水道局職員として働いている。当時はちょうど就職活動を始めた時期であり、東京で企業説明会を受け、夜行バスで朝方に宮城県へ帰ってきた日に震災が発生した。

震災直後は公民館に避難しようと思ったが、飼犬は連れ込めないと言われたため家で家族の帰りを待った。その夜は家族と弟の友人と家で過ごした。弟の友人は地震発災時に弟と一緒に仙台駅にいたようで、塩竈市という港町に家があるため危険だと判断し家で過ごしてもらった。

今まで地震でインフラが使えなくなるという経験はなかったが、その時は気づいたら電気も水道も使えなくなっており、はたまた災害用備品など揃えている訳もなく、その日はろうそくの火で灯りをとった。実家はオール電化住宅であり、停電している状態では湯も沸かせず、「電気がないと何もできないんじゃ、災害には弱いものだな。」と思ったが、振り返るとガスは更に復旧が遅かった。

発災翌日は多賀城市内の状況を確認に出かけた。テレビもつかず、通信手段も役にたたなかったため、何も分からないままで行動したが、友人の無事を確認したかったのと、アルバイト先にいけば何か食料があるかもしれないと思ってのことだった。市内では至る所で衝撃的なことがあった。海の匂いがする田んぼ、積み重なった車で通れない道、遠くで燃え盛る海沿いの施設、道端で泣きながら誰かが死んだと話す人々、泥だらけの街で店の商品を配る少年、後輩の家とともに水に沈んだ自分のPSPとお気に入りのMP3プレーヤー、とにかくたくさんのことがあった。

食料は少なからず手に入ったものの、やはり水が使えないのが大変だった。多賀城市では市有の浄水場の他に宮城県広域水道や仙台市などからの受水を受けているようで、当時はそのどちらもが一時的に供給が止まったという話を聞いた。結局、自宅で水道水を使い始めたのは4月に入ってからだった。

水が使えないのは非常に不便であった。飲み水、トイレを流す水、お風呂など、私の家は飲み物を備蓄していなかったため、水道が出ないと本当に飲むものがなかった。自販機は動いておらず、近くのお店も閉店、あるいは壊滅しており買い物もできず、最初の時期は結構不安だった。何日経った頃だろうか、気づいたら近くの公民館に給水車が来ていた。家からすぐ近くだったため、おかげでトイレと飲み水は困ることがなくなった。どこの街から来てくれたかは確認していなかったが、広島県内のナンバープレートをつけた給水車で、広島から宮城まで給水車を運んでくるなんて大変であろうに、また、しばらくの間私たちを助けてくれて、非常にありがたい話である。

しかしながら、風呂に入るには十分な環境ではなかった。その時は1週間以上も風呂に入っていない状態だったため、一度体を綺麗に洗いたいとは思ったものの、やはり家の水道水は出てこなかった。その時、仙台市では水がでるという情報を自宅周辺で耳にしたため、仙台市にある祖母の家に風呂を借りに行った。祖母の家はたいして遠い場所ではないにも拘らず、実際に水道が使えていて羨ましく思った。他都市で見られるような緊急時用の相互融通管路が仙台市と多賀城市にも整備されていれば、、、もっと早く水道が供給されていたのではないかと思う。

東日本大震災から10年以上が経過したが、その時の経験を活かし、市町村の垣根を越えて強靭なインフラを整備する政策が全国で行われること、また、特に宮城県を中心に仙台市や多賀城市、そのほかの自治体で広がることを願っている。